

# 大地

17号  
1987. 5. 15  
真宗大谷派  
浄国寺(23)5724

## 俳句

山崎 睦

冬来ぬ間 冬来ぬ間とて

墓地を掃く

蓬一葉添えてありけり

娘の便り

淡雪に 犬と子ども

馳けし跡

風邪に寝て 孫の介護の

有難き

地吹雪に 寺苑の枯葉

舞い立ちぬ

## 大地に立つ

加藤 千里

浄国寺さんから戴く寺報の表題である「大地」

此の「大地」の文字の中に、大切な意味が含まれているように思うのであります。

来る五月二十五日は私共の、忘れ去ることの出来ない日であります。私共十二人の兄弟姉妹を此の世に誕生させて下された母親の、五十回忌の祥月命日であります。

私は心に想うのには、一体、他界された人々はいずこへ行ってしまうのだろうか、と。

（今死んだ。どこへも行かん。ここに居る。語りかけても答へはせぬぞ）と、あるバラモンの方が言われました。精霊は浄土へ参ると言われます。夢幻のごとくなる

浄土は、いづこにと神仏に問うてみたとして、答えては貰へません。自らの心の中で偲ぶものでしょうか。

私は天氣の良い日は、外に出て散歩致します。そして田の道の中に佇んで天空を仰ぎながら、妙高

山、南葉山、金谷山、春日山、遠くは東頸城の山並、米山を眺めます。その平野に建ち並ぶ家々、そこに住む人々、皆この大地の上で平等に恵みを受けて育ちまわっているのではありません。

大地は、人類がこの世に存在する以前に既に存在しておりました。其の偉大なる円形の満つるも欠くことのない神仏の慈悲と愛情の世界、生きとし生けるもの、そのすべてを育くむ天空を含めて、大地の大自然こそ浄土ではないのであろうか、と想うのでありますし、そう想いたいです。

亡き人々の肉体を骨にして、丁寧に俱会一処の墓に葬りました。その精霊は、大自然の大地の中にとけこんでおわすならば、大きな声で其の名を呼べば、きくとオーイと答へて貰へる気が致します。いづれ私も生命力が尽きて、大自然の大地の中に入れて戴きたく、肉体のある内に、神仏の真実、法を聞法しながら精進致し、一点の曇りなき精霊と成りたいと願うのであります。

大地こそ、永遠に尽きることはない浄土です。

念仏合掌

## 読後雑感

山崎隆昌

一月下旬、新潟の大和デパートで、写真家平賀治雄氏の個展が催され観に行つて来ました。写真にはとんと不案内な僕ですが、佐渡、越後路の美しい風景写真に（とても地味な美しさ）、絵とは違う写真の「表現する力」を感じ、楽しい時間を持つ事ができました。帰る途中新潟の本屋で『ヒューマニズム考』（渡辺一夫著）という一冊の本を買いました。

解り易い文章で、読者に語りかけるように書かれたこの小冊子はヒューマニスト渡辺一夫のメッセーヂであるといえます。それは、一人一人の人間としての尊厳が何よりも重く大切であること。ところが「人間」の歴史の中で、この最も大切である人の生命（尊厳）が、大きな権力（例えば政治、軍隊、宗教、経済など）から、ゆがめられ、押しつぶされ、消し去られた数々の出来事を悲しみをこめて語られます。さらに、ラブレター、エラスマス等の「人間でありたい」と願ひ、権力の人間の尊厳

への弾圧に抵抗した人たち（ヒューマニスト）の思想を通し、現代に生きる僕たちに、ヒューマニズムの大切さが呼びかけられます。ヒューマニズムとは「一般に、人間尊重、人間解放を基調とする思想、態度」（広辞苑）とされています。この人間としてあたりまえの事が一番難しい事であるといえます。

わずか四十二年前、日本でも「御国のため」とか「天皇の赤子」とかで様々な人間的強制、弾圧がおこなわれ、少しでも「人間でありたい」「抵抗する」と「非国民」とか「不敬罪」とか「アカ」とかとして押しつぶされ、国民一人一人の人間性、さらに生命までもズタズタにされた経緯をもっています。そして又、防衛という名のもと自衛隊が増強され、国家機密法なるものが国会に提出されようとして国民は、働きバチとしてひたすら働き続ける今日の状況を想う時、渡辺一夫の「人間でありたい」とする呼びかけが切なく響いてくるのです。

ヒューマニズムは「権力と人間性」の問題であると同時に、僕たち一人一人の思想、心のあり方の

問題であると思ひます。著者は、「人類は所詮滅びるのかも知れない。しかし抵抗しながら滅びよう」というセナンクールの言葉を引用し文を結んでいます。

平賀治雄氏の「はざ木」という写真を、玄関前の廊下に新しく飾りました。もやに霞む、弥彦山、そして田園風景のこの写真には、平賀氏の人間への暖かい眼が感じられ有難く思ひます。

写真といえは、世界的な写真家で、高田や桑取に縁の深かった浜谷浩はその著「潜像残像」で次のように述べています。

「今や日本は、軍国主義復活として内外から警戒され、経済侵略に挑戦し、世界各国の怒りを買ひ、世界中の嫌われるものになってしまいました。国内では公害という名の人災によって、起こるべくして起つた過失によって、国土破壊、環境悪化に暴走しております。略過去とか、年齢とか、世代を越えた、人間として生きてゆきたいと考へています。人間が生きていくと考へては創造することだと私は考へています。ここにヒューマニスト浜谷浩を見る事ができます。」

## 色・いろいろ

山崎 慎 子

「好きな色は？」と問われてもすぐに答えることは、できそうにない。色に対して、そう敏感という訳ではないが、たとえば「赤」といっても、明度、彩度が違えば色合いも微妙に変わるので、なおさら答えは難しい。あるいは、色の種類ほどに、わたしの気が多いというところかも知れない。

その時、その気分に応じて好みの色は少しづつ変化したような気がする。

十代の一時期、ライトブルーと呼ばれる明るい空色ばかり好きだったことがある。

逆にかなり長い間、藤色と称される、うす紫には、どうも馴染めず、極端なことだが、その色の洋服を着る人の気が知れないと思っただけである。

特に身につけるものに絞って言えば、一貫していることは、地味な色を好んで来たように思う。つまり、紺、白にはじまって、黒茶、灰色……といった類である。今でもどちらかといえば、そう

いう色合いが、気分的にはいちばん穏やかで落ち着くように思うが、ここ数年、少し変化が兆しはじめている。

三年程前、知人を通じて買った無地の着物は、なんとあれ程嫌っていた藤色のものだったし、この秋から冬にかけては、やたらピンクのセーターが着てみたくて仕方がなかったのである。

以前は、たとえ誰かがピンクのブラウスを贈ってくれても、なかなか袖を通す気にもならなかったし、やっと着てみても、何だか心が落ち着かない感じがしたものだ。たの。

何故この頃になって急に、ピンクや紫といった、いわば「色のあるもの」に関心をもちはじめたのだろうか、と自分でもいぶかしく思う。

ただ単に、年をとって来ているというに過ぎないのだろうか。

自分の中から確実に失なわれてゆく「若さ」という得体の知れないものへの執着は、意識するしないうちに拘らず多少あるのではないだろうか。きれいな色に心ひかれてしまふのは、あるいはその反動だといえなくない。

しかし、わたしはそれと同時に、刻んだ年輪の分だけ、色への許容量が広くなったのだ、というふうにも考えている。

夫は、若い頃から赤といえはハデだと思いついて入っているような、徹底して地味が好きな人である。無彩色以外は、身につけるものではないと、固く信じているのではないかと思われる節がある。

そういう人にとって、つれあいたるわたしの変化には、もしかしたら戸惑いがあるかも知れない。一緒に生活する者同士としては、相手が不快に思うことは、なるべく避けた方がよい、とは思っている。

けれど、ささやかな色の冒険(?)を通して、わたしが今までたとえばピンクを着なかつたのは、無意識に働いていた自己規制のせいではなかったろうか、と思いはじめたのである。

人の目を気にしたり、根拠のない概念にしばられて、自分で自分を縛っていたのではなかっただろうか、と思うのだ。

たかが「色」のことにすぎないけれど、

「何色が好きですか？」

日記から

山崎武雄

昭和五十二年五月二十一日  
朝から久し振りに雨、ポツポツ  
あたり始める。

作物には恵みの雨である。  
齊藤洋服屋で来て、洋服を身体に  
あはせ、つめてくれる事となり、  
出来れば三十日までにするという、  
有難し。

十一時三十二分の列車で長野へ  
行く。車窓から眺める新緑の山々  
美しく、見あきず。長野は八人。  
ただ刺激を受けに通う感じ。帰りの  
車中『願海』誌を読む。助田小  
芳さんの文中に、山頭火の  
うしろ姿のしぐれてゆくか

しぐるゝ夕やみに次第に消えて  
ゆくうしろ姿  
自分にも見ることできないう  
しろ姿も、山頭火にはおのれとし  
て見えたのだろう。  
人のうしろ姿もさることながら  
自分のうしろ姿も見える感じのす  
るこの頃である。  
感銘深い文であった。

期待の横綱、大関の相撲は、兩  
方とも横綱の勝。輪島対費の花。  
旭国には勝たせたかった。  
睦、直子退院したけれど暫く手  
伝いに行くこととし泊りに行く。

五月二十二日  
昨日来の雨に、庭木も畑の作物  
も生き返った感じ。新緑が目にし  
みて美しい。  
午後、つゝじ、アザレヤの植替  
えを済ませ、又つゝじ(紅)を地  
面におろす。

その後、盆栽置場を板一枚追加  
し、先日来植えかえた、つゝじ(四)、  
樺(十鉢)を其処へ並べる。  
秋までどんなによく育ち変化して  
行くか楽しみなり。  
山頭火の  
うしろ姿のしぐれてゆくかの  
句について終日考えて見る。

五月二十三日  
今日は、幼稚園の親子遠足(池  
の平)とて慎子、前日より張りき  
り、いろいろ準備をしていたのに  
あいにくの雨。  
睦、慎子、子供三人を乗せて、  
今保へ豆を貰いがてら、遠足の代  
りに行く。

今保に大歓迎され、午後二時半  
無事帰る。  
相撲は、北の湖優勝。決定戦に  
輪島を破り優勝。

あとがき

※「大地にたつ」の加藤さ  
んは、上越市藤巻の人。今  
回二度目の原稿を快く寄せ  
て下さいました。有難うご  
ざいました。

※今年には前住職・武雄の七回忌  
になります。この度は日記の中か  
ら、ちょうど十年前の五月の日記  
をえらんでみました。

※二十一日分にある長野行という  
のは、声帯を失った父が、食道発  
声法の練習のために、長野日赤に  
通っていたものです。又、山頭火  
の句は折にふれてよく引用して  
いました。

※文字の陰から、ことばの裏側か  
ら、父の姿や顔が、鮮明に思い出  
されて来ます。その思い出はつま  
り、父から私たちへの呼び声であ  
ると思えますが、耳をすまして、  
聞きとらなければ、と七回忌にあ  
たって、改めて思われます。七  
回忌の法要を、ほんとうに爽りあ  
るものにするのは、呼び声に耳を  
傾け、それに応えて行くことでは  
ないかと感じております。(慎)